



Title	特集「人間と環境」にあたって：人間科学が問いかけるもの
Author(s)	佐伯, いく代
Citation	未来共創. 2026, 13, p. 23-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106422
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集「人間と環境」にあたって —人間科学が問いかけるもの—

佐伯 いく代

大阪大学大学院 人間科学研究科

1. 人間と環境

地球という星が生まれて約46億年がたった。それがどれほどの長さなのか、私たちには想像することすら難しい。その歴史のある時点において、生命が誕生し、まるで呼吸をするかのように、進化と絶滅が繰り返された。呼吸は少しずつ深くなり、時折起こる大絶滅期を乗り越えながらも、生命の多様化が進行する。その過程で、猿人という生きものが登場した。猿人は、約700万年前に出現したと考えられており、アフリカ大陸の片隅で、はじめは地球という大きな生態系のほんのささやかな部分を構成するにすぎなかった。しかしこの生きものから進化した「ヒト (*Homo sapiens*)」は、ほかの生きものよりも大きな脳を進化させることができた。そして「言葉」、「火」、「道具」を巧みに操り、地球史上たぐいまれな力をもつ存在となった。その数、現在約82億人。はたしてこの生きものの呼吸は、地球とともに同調しているといえるだろうか。

1972年、スウェーデンのストックホルムにて、「人間」と「環境」という二つの言葉を冠した国際文書が採択された。「人間環境宣言」である¹。別名「ストックホルム宣言」とも呼ばれるこの宣言は、同年に開かれた国際連合人間環境会議にてまとめられ、環境問題というものを、国際的なメッセージとして初めて広く伝える文書となった。宣言の冒頭では、「人間環境の保全と向上に関し、世界の人々を励まし、導くため共通の見解と原則が必要である」とうたわれ、人類が「歴史の転回点に到達した」こと、「環境への影響に一層の思慮深い注意を払いながら、行動をしなければならない」ことなどが、7つの宣言と、26の原則とともに記された¹。

わたしは先日、この人間環境宣言を大阪大学の学生たちと一緒に読むという授業を行った。学生たちは、この宣言の出された時代には生まれていない。しかし、人間環境宣言が発表されてから約半世紀—この間、地球環境に起こった出来事を未来へと背負っていく若者たちに、ぜひこの宣言について意見を聞きたいと考えた。学生から出された意見は多様であった。宣言から約50年を経て進歩したことの一つは、この宣言に書かれていた指針が、多くの学生にとって、あたり前の倫理規範として受け止められていた点であろう。例えば、環境は「人間の福祉、基本的人権ひいては、生存権そのものの享受のため基本的に重要である。」との主張は多くの人に受け入れられ、SDGs (Sustainable Development Goals) などを通じて、持続可能な社会に対する認識は高まったという意見があった。また、具体的な成果がみられた分野に有害物質の排出規制があった。フロンガスの規制によりオゾンホールは徐々に回復し、痛ましい公害の歴史を経て、日本は世界屈指の環境汚染防止技術をもつ国となった。興味深かったのは、宣言にある「万物の中で、人間は最も貴重なものである。」という表現に違和感を覚えた学生が少なからずいた点である。「人間中心すぎる考えではないか。」疑問とも批判ともとれる意見が出された。その後、この宣言が、貧困からの脱却や経済開発を重視する発展途上国と、環境保全を主張する先進国との対立の中で生まれたものであることを確認した。

宣言時から変わらないこと、むしろ後退していることについてもとりあげなくてはならない。例えば原則にある野生生物の保護については、宣言後も生物多様性の減少は止まっておらず、絶滅危惧種の数などの指標値はいつこ

うに改善していない。資源の循環利用に関しては、使い捨てプラスチックなどの広がりにより、新たな汚染や廃棄物問題が生じている。宣言には、国家間の広範囲な協力と国際機関による行動が必要と記されたが、地域紛争は頻発し、自国中心主義を掲げる大国の台頭で分断と対立は深まっている。資源の枯渇や環境汚染といった直接的な要因だけではなく、戦争という人と人との軋轢により、水や食料などの自然の恵みを享受できない人たちがいる。気候変動については、1992年、環境と開発に関する国際連合会議（地球サミット）にて気候変動枠組条約が採択され、京都議定書とパリ協定という大きな取り決めがなされた。これにより、脱炭素に向け意欲的な政策を掲げる国々があらわれたが、気候変動に疑義を投げかけ、パリ協定からの脱退を表明した国もあった。我が国は再生可能エネルギーへの転換を積極的に進めているが、二酸化炭素の吸収源である森林を伐開してメガソーラー施設がつくられたり、風力発電施設がバードストライクを起こしたりして、生物多様性に負の影響を与えていることが懸念される。

自然環境と調和し、持続可能な社会を築くことは、地球に生きる私たち人間にとって尊重すべき価値概念である。だが、個人の行動や社会の仕組みは、それとは必ずしも一致していない。とりわけ資本主義社会がもつ矛盾についてとりあげてくれた学生もいた。環境問題は、一人の人間にはあまりにも大きすぎる。特に気候変動や海洋汚染、生物多様性の減少などの地球規模課題は、日々の生活において喫緊の問題として受け止めることが難しい。化石燃料を消費しても、プラスチックごみを排出しても、それが自分自身に即座に不利益をもたらすことはなく、また個人の小さな取り組みによって、何かが劇的に改善する様子もみえづらいためである。ジャーナル「未来共創」において、人間と環境との問題をとりあげる理由もここにある。地球の未来を思い描くとき、人間の行動はどのような影響を与えるのか。他の生命や周囲の環境とどのような関係性を築いていく必要があるのか。日常生活では考えの及びづらいこれらのことについて、私たちは学び、議論しなくてはならない時代にある。

人間と環境との関係性において、日本は特異な歴史文化をもつ国ともいえる。まず、日本は世界屈指の森林国・海洋国である。島国特有の豊かな生物

多様性に恵まれ、これに根差した精神文化が育まれた。山川森海には神様がおり、妖怪が住み、禁忌を犯すとたたきがあるとおそれられた。いただきます、と自然の恵みに感謝をし、地域の共同体においては、独自の資源循環や分配の仕組みが成立した²。急峻な地形と雨の多い気候はしばしば大災害をもたらし、人は自然をコントロールすることができない。そのような精神性が日本人の根底には存在する。そもそも日本には戦前まで、自然（nature）を意味する言葉が存在していなかった。より正確には、「自然（じねん）」という単語はあったものの、それはnatureではなく、「おのずから」あるものを意味していた³。あるべきものがあるのままだと、それには人もそれ以外のものとも区別しない、という一体化された世界観があったと考えられる。里山をみてみよう。里山は、集落とそれを取り巻く二次林、水田、畑地、ため池、水路、草地などから構成される、日本の農村景観を代表する地域概念である⁴。ここで注目すべきは、人は、自然環境を守ろうとして里山をつくっていたわけではないことである。森林を伐採し、再生させ、耕作地では食料を生産し、草原から緑肥を得た。この営みは基本的に、自分たちが生きていくための、つまり人間のための管理であった。しかしそのことがはからずも、生きものたちに多様な棲み処を提供し、里山全体が生命のあふれる豊かな空間となった。まさに「共生」である。

日本にこのような生態系が存在していたことは、人間科学という学問分野においても十分に理解しておく必要がある。なぜなら現代は、必ずしもこのようにはなっていないからである。自分のため、人間中心の生活を推し進めると、周辺環境や人以外の生命に負荷をかけ、資源は枯渇し、気候や循環のシステムが不順を起こして将来世代に不利益が生じる。このことを人間の問題、つまり自分自身の問題として認識をしていく必要がある。これから生まれる「未来」の人たちには、なんら責任はない。人間環境宣言の時代にあった途上国と先進国という空間的な不公平さに加え、世代間という時間的な不公平さが生じることも、環境問題の大きな特徴である。

こうした歴史をふりかえると、環境問題はとうてい解決できないことのように思えるかもしれない。しかし、あきらめてしまうのは早計である。地球という星に人間が生まれたことには、何らかの意味がある。人がいることに

よって、地球がより輝きを放つような仕組みを考えていく必要がある。それについて、人間科学はどのようなことができるだろうか。一つには、フィールド、つまり現場に赴き、人間と環境とに起こっている出来事を丁寧に把握することである。そのとき、「個人」、「集団」、「地域」、「社会」といった、人間科学が長くとりこんできた視点をもつことは、問題の構図をとらえる上で有効である。地球上に、人間の影響を全く受けない生態系はほぼなくなったといわれるが⁵、日々、変容する自然環境に目を向け、自分たちに何ができるのかを考えたい。二つ目には、環境に関わる人間の意識や行動を観察し、その特徴を明らかにしていくことである。環境問題は、理学や工学といった自然科学的なアプローチによって現象やメカニズムが明らかにされ、技術による解決を提案できるようになってきた。しかし、科学技術が課題解決に結びつくためには、そのことに人が価値を認め、実践する意欲をもたなくてはならない。三つ目は、人は、この地球上でどのような存在になりたいのか、ほかの生きものや自身を支える環境とどのような関係性を結びたいと考えるのか、心の奥底にある「地球観」、「環境観」、「自然観」といったものを議論することである。人新世を迎えた現代、大きな力をもった人間が、地球において果たすべき役割を真剣に問わなくてはいけない。人間科学のもつ学際性、国際性、実践性、さらには既存の思考的枠組にとらわれない柔軟性や独創性などが問いかけるものに期待したい。

2. 特集の構成

上記のような視座にたち、本特集は、人間と環境をテーマとして、7本の論考を発表する。一本目は、「分断と対立を超えて ―激動する国際社会と人間・環境・未来―」という研究会報告である。雑誌「未来共創」の特集記事では、研究会の報告を掲載している。今回は、2025年10月に共生学コロキウムとして開催されたシンポジウムの内容を紹介する。ここでは2名の専門家をお呼びし、気候変動に関する外交交渉や、国際平和に向けた被爆樹木の保全活動をテーマに講演をいただいた。上述したように、環境問題の解決には国際協調は欠かせない。この点について現状を理解し、グローバルな視点から議

論を行うことを目的とした。

本特集では、ローカルな視点や実践事例も多く盛り込むこととした。二本目の論文は、2025年11月に共生学系環境共生学分野で実施した瀬戸内海でのフィールド実習についてである。この実習は、本学人間科学研究科のモハーチ ゲルゲイ教授と、津田塾大学の木村知美准教授（大阪大学招へい准教授）らが中心となって企画され、気候変動下における瀬戸内海の状況からプラネタリーヘルスや食の持続可能性などについて学ぶものであった。本実習に参加した学生たちの生き生きとしたフィールドエッセイをぜひお読みいただきたい。

三本目の論文は、2024年および2025年に大阪大学吹田キャンパスで開催されたネイチュア・フィーリング自然「感」察会についてである。日本は豊かな生物多様性をもつ国だと述べた。しかし、都市化が進み、人が自然とふれあう機会は減少している。そのような中、本報告では五感を使って自然とふれあう「ネイチュア・フィーリング」の実践事例を紹介し、本活動が多様性・公平性・包摂性(DE&I)に寄与する可能性について議論した。ネイチュア・フィーリング自然「感」察会には、大阪市を拠点として活動する「NPO 法人ヘレンケラー自立支援センターすまいる」(以下、すまいる) から、目と耳に障害をもつ盲ろう者の方々にも参加をいただいた。そこで、すまいるの運営にかかわる石塚由美子氏と山崎初枝氏に、「盲ろう者の支援活動における未来共創」という連携報告を寄稿いただき、四本目の論文とした。お二人にはお忙しい中、快く執筆をお引き受けいただいた。この場をお借りして感謝申し上げたい。

五本目の論文は、本学人間科学部の河本昌磨氏による「フィンランド南部の保護地域における自然ツーリズムの特徴」である。河本氏は本学の交換留学制度を利用し、フィンランドのオーボアカデミー（Åbo Akademi）大学に約8か月間留学した。本報告では、留学中に得た観察知やフィールドワークの体験をもとに、フィンランドと日本との自然ツーリズムの違いなどが議論されている。

六本目の論文は、大阪大学人間科学部コミュニティー・ガーデンの活動紹介である。このガーデンは、2022年に大阪大学大学院人間科学研究科のモハーチ ゲルゲイ教授と太田貴大准教授とが吹田キャンパスの人間科学部棟脇に設

置したものである。実際にガーデンを利用する大学院生の平木雅氏(人間科学研究科)が、養蜂、畑、コンポスト、ビオトープなど、多岐にわたる取組の状況をまとめてくれた。

七本目の論文は、2026年2月に開催された環境共生セミナー「動物の感情推定技術のELSI」の報告である。環境共生セミナーは、本学人間科学研究科の環境共生学分野が実施しているセミナーである。今回は、同分野の太田貴大准教授らが中心となって、動物の感情推定にまつわる倫理的・法的・社会的問題(Ethical, Legal and Social Issue; ELSI)について講演や意見交換が行われた。

七本の論文は、極めてバラエティーに富む内容である。読者の方には、これらの論文から「人間と環境」というテーマの幅広さや奥深さをぜひ感じていただきたい。本特集が、多くの人々に、人間の問題としての環境を考えるきっかけとなれば幸いである。

注

- 1 https://www.env.go.jp/council/21kankyo-k/y210-02/ref_03.pdf
- 2 湯本貴一編 2011『環境史とは何か』文一総合出版
- 3 相良亨 1987 「「おのずから」としての自然」『日本の美学』3(10): 20-35。
- 4 <https://www.env.go.jp/nature/satoyama/top.html>
- 5 Watson, James E. M., Venter, Oscar Venter, Lee, Jasmine, Jones, Kendall R., Robinson, John G., Possingham, Hugh P. and Allan, James R. 2018 Protect the last of the wild. Nature 563: 27-30.